「核を入れる」（高校入学礼拝式にて）

2025 年 4 月

中山 昇（学園創立者の一人：1925～2019）

聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。すると、『あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者』という声が、天から聞こえた。　（ルカによる福音書 3 章 22 節）

皆さん、ご入学おめでとう。今年も桜がちょうど満開で、心から皆さんを歓迎しています。

いろんなコースを通って、それぞれに自分自身の歴史を刻みながら、ここに集まりました。清教学園ですでに 3 年間、中学生として学んだ諸君がいます。他の中学校から専願で来た人、併願で合格したがもう公立高校を受けずに来た人、公立入試がうまくいかなくて来たという人もいます。

私たち教師は、この新しい出会いを与えてくださった神様に心から感謝しています。

皆さんは今、自分がこの学校を選んだと思っているかもしれませんが、本当は神様に選ばれ、導かれたのだということがだんだんわかってくると思います。

ところで私たちの人生というのは不思議なもので、どんなことが幸いするかしれません。すんなり来ることになった人が幸福なのか、躓いたけれどもそれが次によい結果を生むことになるのか、それはその人の心がけでいろいろな形をとります。

ギブランがこんな寓話を書きました。

ある海の底で 2 枚のアコヤ貝が話をしているのです。ひとつが「私の身のどこかに変な円いものがあって、とても痛くて苦しいのです」と。すると他のひとつが自慢そうに言いました。「私には何の苦しみもない。身の内も外も申し分なく快適な毎日です」と。傍で聞いていた蟹がその元気なアコヤ貝に言いました。「あんたはお丈夫で結構ですね。けれどもあなたのお友だちはうらやましい方だ。何しろ大変な値打ちの真珠というものを育てておいでですから」

と。ただ楽しいことを追いかけているだけでは、珠を抱くことはありません。ちくちく痛むところがあって、それをかばい、包みこんでいくうちに真珠が育ってゆきます。始まりは何かというと、貝に入り込んだ異物です。思いもかけない小さな石粒です。それが核であり、始まりなんです。

学校の玄関のところに額のあるのに気づいた人がどれほどあるでしょうか。

神なき教育は知恵ある悪魔をつくり　　神ある教育は愛ある知恵に人を導く

と書かれています。私たちに知恵が与えられているのは、それを使って人々のために役立てるためであって、自分のためだけに使うのは悪魔のすることだという意味であります。これが聖書に基づく清教学園の核です。

皆さんはそれぞれにいろんな能力を与えられて今日まで磨いてきました。よし次はこの大学に進むんだと心に決めている人もいるでしょう。部活動の評判を聞いてきた人もいましょう。国際交流に興味をもつ人もたくさんいるでしょう。それぞれの胸の中に今あたためていることを引き出し、実を結ばせることが清教学園でいう”**賜物を生かす人生**”です。人にも神にも喜ばれる真珠をつくりだすにはどうすればいいのでしょう。

私たち教師の仕事は、その核を入れ、膜をつくる手伝いをすることであります。伊勢の御木本の真珠工場を見学した人は知っているでしょうが、その核を入れる作業が、聖書でいう土台を据えるということであります。それに応えてより高い志を心に蓄え、精進してほしいと思います。

今日をその新しい出発の日とすることを願っています。おめでとうございます。

中山昇『みおつくし』（1995 年）より